



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | はじめに                                                                              |
| Author(s)        | 太田原, 高昭                                                                           |
| Citation         | 北海道大学大学院農学研究科技術部研究・技術報告, 9                                                        |
| Issue Date       | 2002-03                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/35425">https://hdl.handle.net/2115/35425</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 9_hajimeni.pdf                                                                    |



## はじめに

農学研究科技術部長

太田原高昭

国立大学の改革が大きな話題になっています。改革はいつの時代にも必要ですが、時流に流された「上からの改革」では国民が国立大学に期待しているものを失ってしまう結果になりかねません。大切なことは、改革が大学人自らの責任において行う自主改革、「下からの改革」になっているかどうかだと思います。

その点で、今年からスタートした北方生物圏フィールド科学センターは、農学部施設計画委員会において足かけ6年もの検討を経た文字通りの自主改革であります。それだけに農学系の付属施設に関する文部省の方針にも大きな影響を与え、全国の農学系学部のモデルとみなされております。新しいセンターが是非ともそれにふさわしい業績を挙げていくことを期待しています。

農学研究科では、これに続く自主改革として、教授会の構成を教授のみから助教授、講師に拡大することを決め、新年度から実行に入ります。北大ではこれまで教授だけの教授会となっていたのは、他には医学部と獣医学部だけで、むしろ遅きに失したともいえるのですが、農学研究科としては大きな改革です。これによって今後の管理運営がより民主的かつ効率的になることを願うものです。

ハードの面では、紆余曲折がありましたが、本館西側に6階建て5140平方メートルの新棟が14年度に着工されることが決まりました。順調にいけば、15年度から3年計画で進行するはずの大型改修とあわせて、現在点在的に配置されている研究室が専攻ごとにまとめられることになり、大学院重点化改革がハード面でも完成することになります。その先に学科再編があるのかどうか、そのうちにそのことも課題になってくるでしょう。

しかし何より大切なことは、こうした改革が農学研究科、農学部の教育研究の実質的な向上につながることです。国が上から進めようとしている改革にもきっちりと対応して、自主改革の成果を示さなければなりません。「トップ30」という表現はなくなりましたが、これからの予算配分がますます実績主義に傾くことは避けられないと思います。教官の力量がいよいよ試されることになります。

しかしこれからの教育研究は個人プレーでなく、ますますチームプレーの様相を強くしていくでしょう。その中で優れた技官、テクニシャンを有する部署が有利になっていくことは明らかなです。したがって優秀な人材を確保しうるための条件整備が今まで以上に重要になります。一人一人の技術者としても、その組織である技術部としても、いよいよ正念場を迎えていることを肝に銘じようではありませんか。